石見國
石見海

〔萬葉集相聞〕柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二首幷短歌、

石見乃海、角乃浦回乎、浦無等、人社見良目、濱無等、一云磯無登人社見良目、○下略

隱岐國
隱岐海

〔增鏡新島もり〕本院○後鳥羽はおきの國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へあじろ車の、あやしげなるにて、七月六日いらせ給、○中略はるゝとみやらるゝ海のてうぼう、二千里の外も殘りなき心ちする、いまさらめきたり、しほ風のいとこちたく吹くるをきこしめして、

我こそはにゐじまもりよおきの海のあらきなみ風こゝろしてふけ

海路

○

〔書言字考節用集乾坤〕海路

〔古事記上〕爾豐玉毘賣命、知其伺見之事、以爲心恥、乃生置其御子而、白妾恒通海道、欲往來、然伺見吾形、是甚怪之、卽塞海坂而返入、

〔古事記傳十七〕海道は、宇美都治と訓べし、萬葉九二十八丁に、海津路、書紀景行卷に、海路などあり、

〔日本書紀景行七〕二十七年十月己酉、遣日本武尊、令擊熊襲、○中略然後遣弟彥等、悉斬其黨類、無餘噍、既而從海路還倭、

〔萬葉集九相聞〕鹿島郡苅野橋別大伴卿歌一首幷短歌○長歌略

反歌

海津路乃名木名六時毛、渡七六、加九多都波二、船出可爲八、

〔萬葉集二雜歌〕角鹿津乘船時笠朝臣金村作歌一首幷短歌

越海之角鹿乃濱從、大舟爾眞梶貫下、勇魚取海路爾出而、○下略

〔延喜式二十六主税〕諸國運漕雜物功賃○中略

北陸道　若狹國、海路駄別稻十束五把　海流自勝野津、至大津、○下略